



錦囊智術全書

78
1326



錦囊智術全書

卷五

78
1326

門 8
號 1326
卷

78



曆と一夜見と
毎月の大小并
毎月朔日のま
干と諸よ覚
ゆり法
一先年の曆を
神ある毎月の
大小とえて是を
式たのむれ指
あてんせんす
中指と大さし食
指と小しして。

坊補拾玉智恵海卷之上

智術門


藤野 潔氏遺愛之記

竹よて捲遠ひのふやう

一行と捲りびよ切やうは玉捲柱のよき

あつき竹と  かくれこく

かし。竹を捲振よてさうられし

攪きれば  かくれこくよあり。い二

おらうつきらると。一方よて竹乃あつ

づおし。一方ハ内。一方ハ外と如はし。捲と

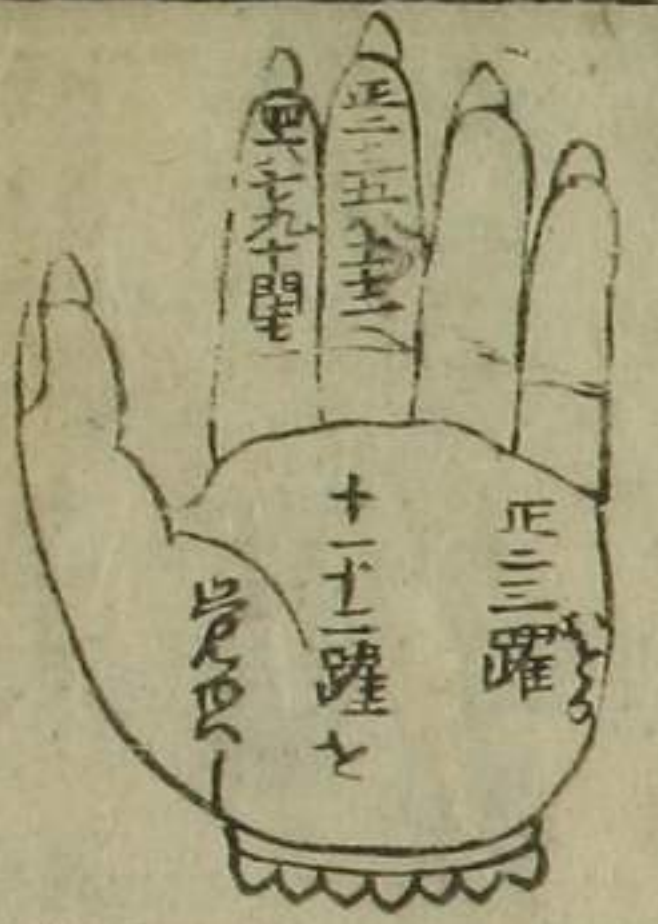
離しめえへさる程らくま  割れハ

明治四十一年四月廿四

藤野 潔氏遺愛之記

曆此次第と二の
 乃指よる或ハ大二
 十月辛酉。或ハ小
 何れ月躍とス
 事と定へ正月
 大かれハ中指よ
 上筭ちりめ
 正月小かれむ
 食指より筭へ
 ちりじへかく
 のてく一食指
 よあちんぬれバ

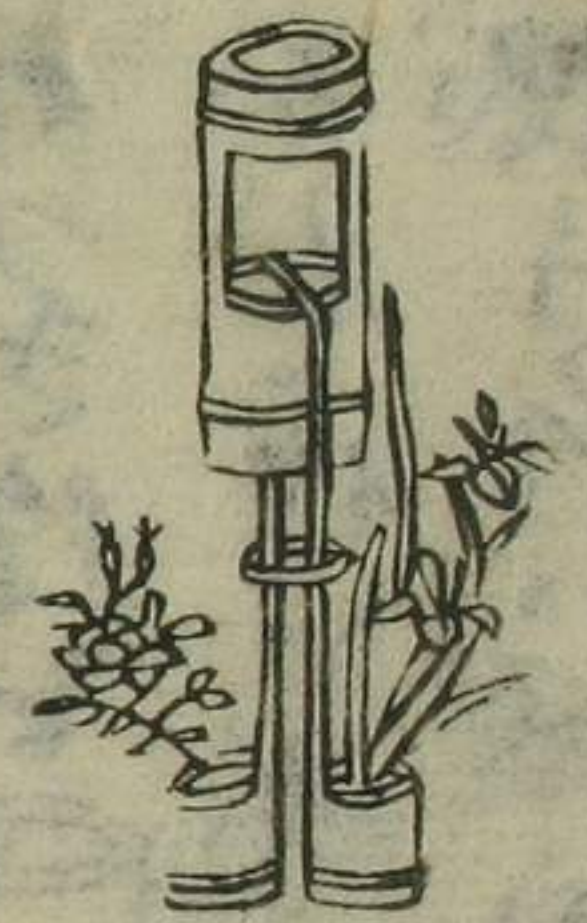
毎月大小と定む
 事ふし。たはば
 近享二丑年の
 大小ハ曆と定て
 是のちり見ゆへ



一毎月朔日の十二
 とおちり其年の

かくれどく梅遠ひはぬなり
此法し
 凡或ハ大らんよて梅遠ひやう。是月一
 よても。神中をうて後法のてく切へし

竹苑生朧どめ入様此事



竹苑生乃朧どめ入やう
 是れどい入やう



風玉のてくよこめて梅と
 入とき
 是と梅乃入る外

いあう中をさぐりし。梅朧トトへ
 ちるセバ是のてく朧ト入此苑生と

ありなり

風玉乃法

火と吹玉の制衣法

一落き洞よて椽乃形なる梅と梅へ腹
 に針よて突うるとき穴あり。蒂あり
 枝を付て梅と次。肉へあとかい入とき
 是と火乃よよとくへい小き穴より自
 火と吹る奇めりり
 湯此徳利罈を伏しやう
 一場の法利よ罈入らう。中へ金櫃乃
 入やうなればあをい。是と

正月此相日、何の
 乃十二支ありと曆
 をてて、是と我れ
 の、此小指の頭、小
 指の頭、十二支の
 次、末とあてて、皆人
 食指の二節、まご
 へ下、時、其月、大か
 れ、食指の、小、節、
 七、次、の、月、相、と、し、
 其、月、小、を、れ、食、指、
 の、か、う、り、二、目、の、節、
 と、次、の、月、相、と、定、め、
 正月朔日、十二支、よ
 り、其、大、小、を、随、て、小、指
 の、頭、より、食、指、の、小、節、
 或、二、目、此、節、ま、で
 十二支、の、次、系、よ
 數、て、二、月、乃、朔、日
 を、知、べ、し、十、二、月、何
 れ、も、か、く、と、し、鬼
 角、河、れ、の、月、此、朔
 日、よ、て、も、ん、見、あ、る



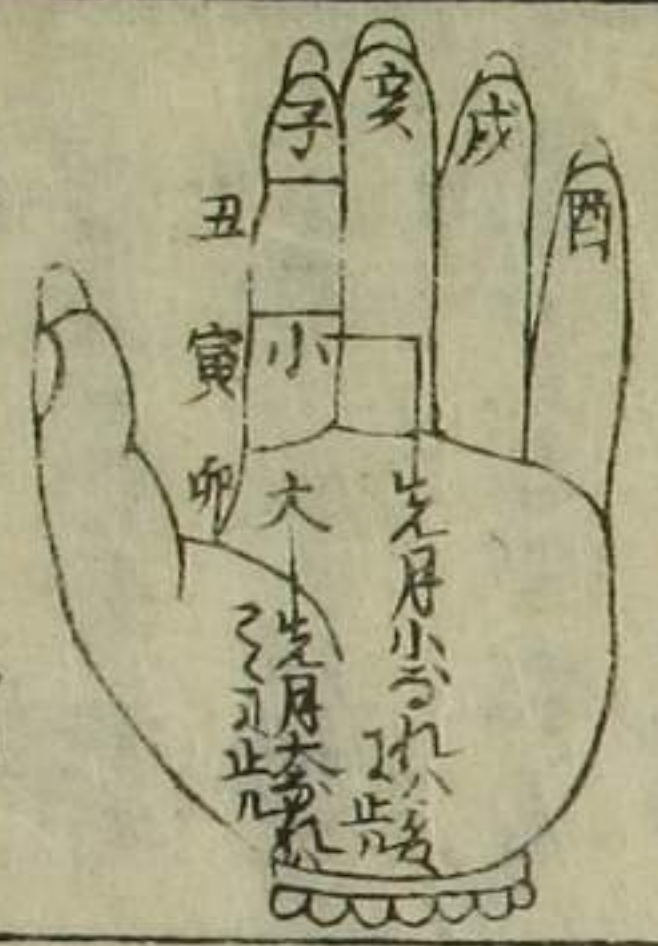
造化よをどしやう。一、束、乃、う、ち、よ、厭、面、
 の、づ、う、か、し、も、け、く、か、ど、し、や、う、ハ、大、豆、を
 徳、利、へ、い、つ、め、み、と、入、と、く、べ、し、他
 あ、ま、り、つ、よ、く、つ、め、ぬ、れ、バ、徳、利、い、さ
 さ、く、る、を、し、り、
 煖、雜、の、山、坂、七、曲、九、折、か、ど、間、の、ち、や、う
 凡、煖、雜、の、山、坂、ハ、地、平、ハ、ち、や、う、と、れ、バ、間、さ、介
 ち、れ、ホ、鏡、を、引、て、も、う、り、い、つ、ま、で、き、と、間、ち、が、あ、り、
 一、煖、雜、の、山、坂、七、曲、と、か、ど、間、を、弁、よ、ハ
 比、曇、乃、ど、く、ち、り、の、を、擲、へ、
 是、と、押、海、ハ、し、て、何、冊、月、こ、こ、此
 枕、と、弁、な、り、。比、法、云、造、化、よ、し、て、然、も
 か、し、も、ち、ら、が、ハ、す、。移、ら、ひ、車、一、な、り、



と云とく。是ふ
正曆二月朔日
卯酉とあること香の
とあり。又二月朔
大
延享二丑年

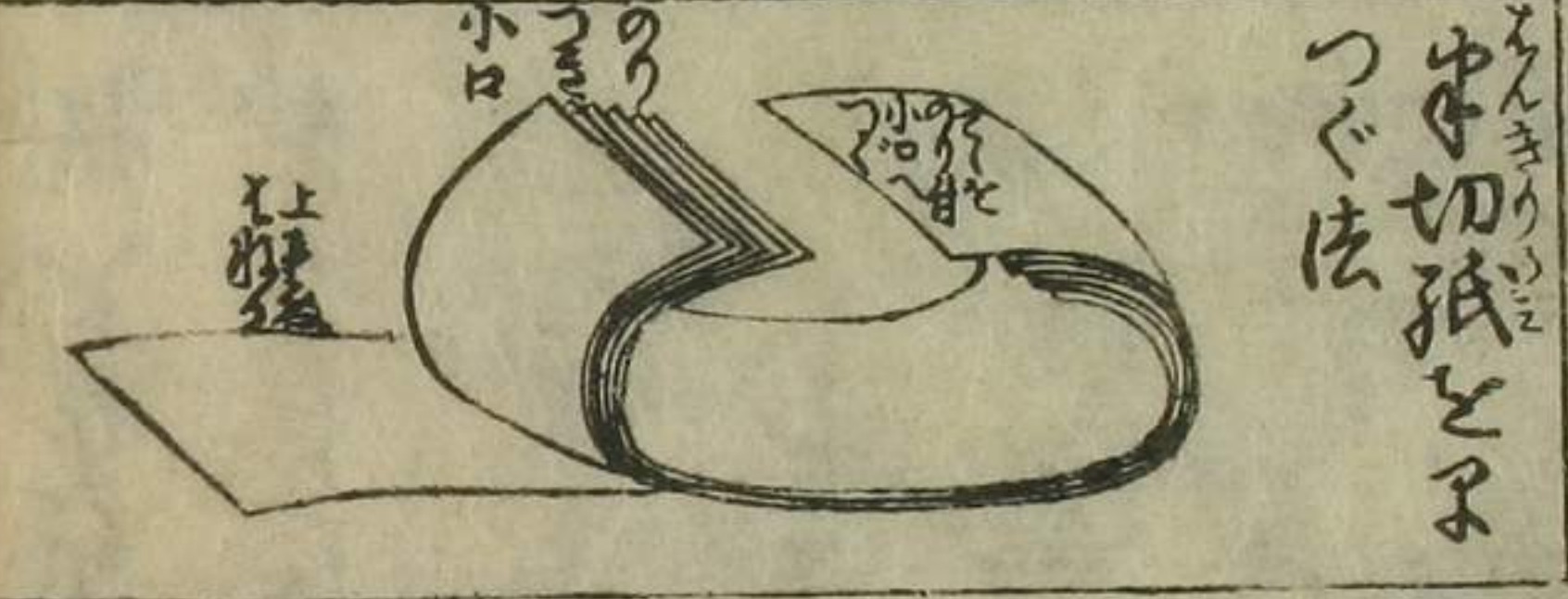
正曆二卯三酉五甲

八子 十一辰 十二戌
小
四卯 六寅 七未
九午 十亥 十一戌



正月大相日酉かれ
乃なるるの二月

半切紙其外紙折子つぎの法



よひつぎなきやうよりへ。古投
よても。二十枚よても。小口と捻り出し
まつぐへき小口へ糊をつけ
ひ帯の鹿丸方をひつくり
へへ。糊付する小口の上帯
と一枚を福かのひつくりへ
より下小口へゆがまのさうやう
やうよつぎあハセ。よよて
おしつらよ。二十枚なごう一夜
よつげ。粘も独りまひてをなかり

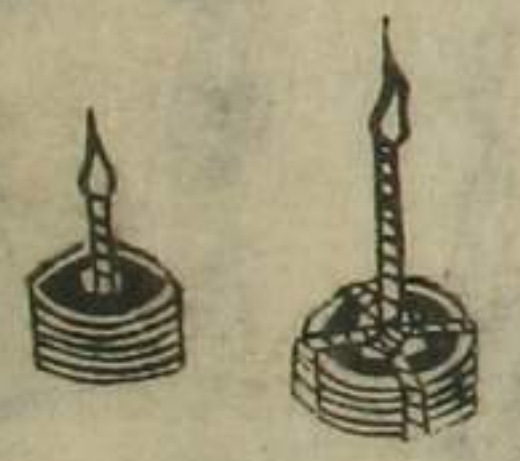
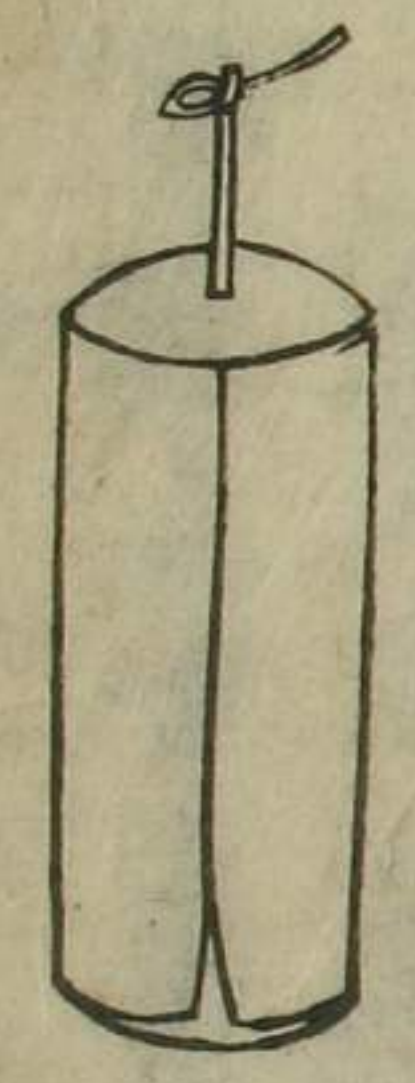
湯もあもなきよよて飯を炊の極仕事
一山中。或ハ山中やどよても米ハ向まごも
湯釜をくくして飯を炊きやうあき
時ハ其色の浄き土地と深さみす
ばり堀。米を薦よ包こて其中へ
埋よく土をきせ。ま色の草本。本は糸
と集め。其上よて焼。志らうくくして堀
出し。足きバ。加減よき飯とあなり
粥よて煙奉なき極よ飯焼やう仕事
一海上遠よ乗出してハ粥むくりよて

名惠

相目ハ卯とある。
 又二月大それハ小指
 二食指の二節
 二節とある。二月相
 ハ酉とあるなり。
 此法と終く工ます
 れハ何子何百日
 先も何子何百日
 後も即座と考
 あるとのん

一屏風の長さ不
 相違なる縁幅
 ハ八尺若葉掛なり。
 其恰好と積り
 する細工人の手
 と見て定式とを。
 高サ五六尺あり
 屏風ハ縁の幅
 是寸七八分但小ハ
 小縁ハ式分分分
 三分までよすべし。
 高サ二四尺あり

あなりし。飯まで飯焼バ。志ハもやめて一
 も食し。か。ハ時獨よても全よて
 也。底へ食挽とうつふけ入。其よ上へ米
 といれ。飯と汲入と志け焼なり。飯と
 於て後。器へうつし。見れば。器とくくうつ
 かけ入る。挽の中へ。こままりこれ。飯か。も
 志ハは。め。次。奇妙なり
 提灯をき。下よて。何人ま。よても。迷
 こ。し。ら。へ。や。う。の。事
 一旅。どよて。園。此。飯。提灯。を。こ。と。こ。こ
 子。迷。こ。し。ら。へ。や。う。ハ。先。土。器。二。枚。と。ひ。く。提
 へ。ち。なり。一枚ハ。覆。こ。一枚ハ。盛。こ。ハ
 二枚の。か。け。と。紙。と。ひ。く。飯。よ。て。う。ち。と
 丸。く。なり。上。の。う。つ。ふ。け。する。土。器。の。中。に
 穴。と。あ。けて。こ。の。う。ち。と。通。して。提。持。こ。こ。ら
 と。なり。下。の。仰。する。土。器。に。油。と。入。三。足。の
 紙。燭。と。入。と。焼。す。なり。以。是。考。へ。知。べし



紙燭是のまりに
 とつけらるがよし
 名は淡の元より
 妙もまきては

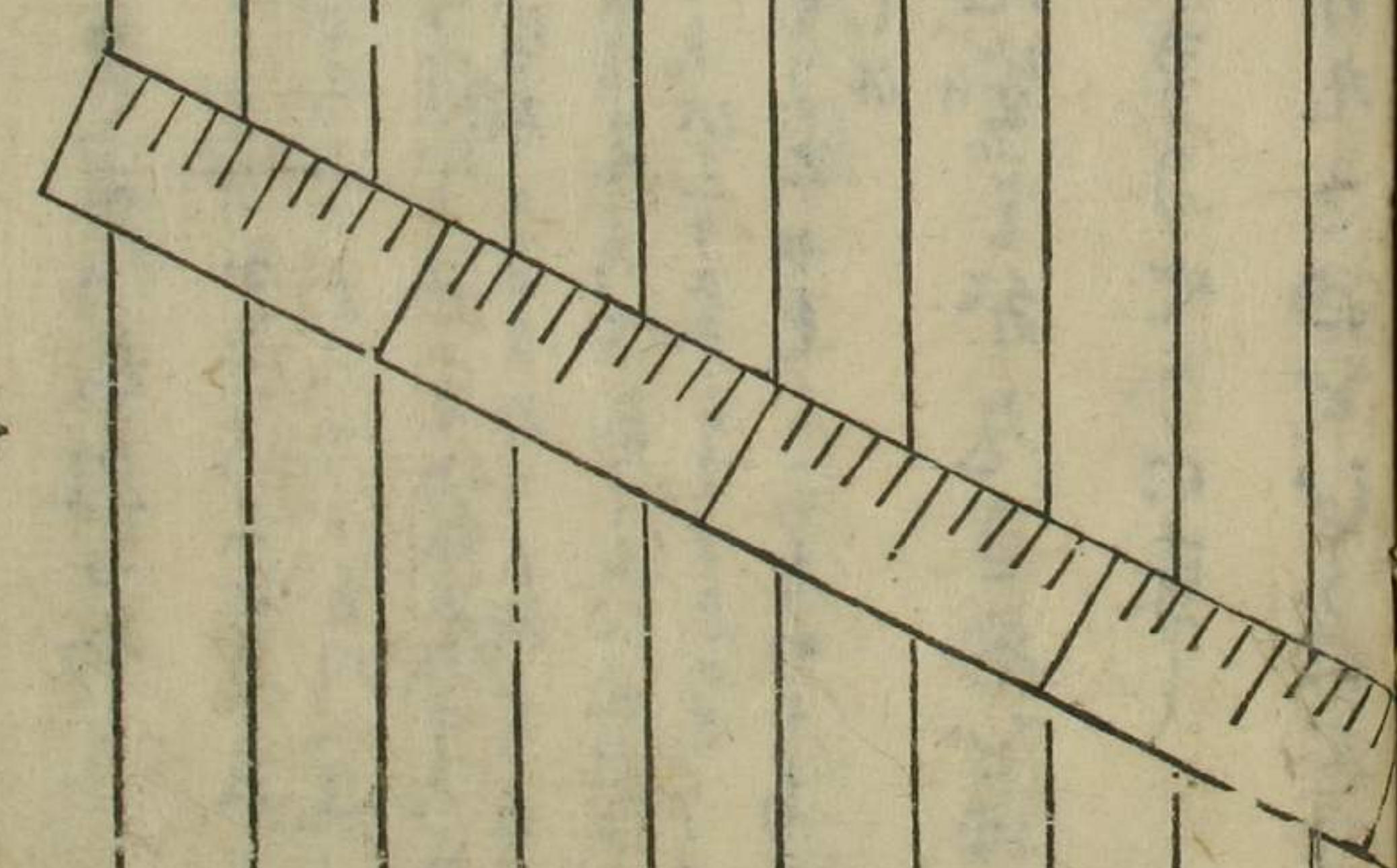
屏風ハ縁もぐ
 三寸二分五分
 すべし。さハ八
 九尺横三二尺も
 ある大屏風乃
 縁幅ハ二寸七分
 うり八九分を三
 寸すべし
 榎此引釘隠
 等の鉄拍子
 鋪らと磨す
 して新ます法

一ハ油障子乃
 引釘隠を毛
 彫摸地ある地古
 く溝くろハ新よ
 磨くときりの也。
 湯の中へ入替く
 煮て丸出し布
 まで拭へし。忽
 新く成るすれ
 硝子の碎らと
 継合する法
 一硝子の碎ら

右端ハ一つづつ揃ら由れば百人あても
 暫時よ出来るなり

扇卦ナリに系より格れ傳授

一たといハ四寸内よ十寸の系を引ハ四分づ
 ちれバうと忘れらたり。三寸五分乃内よ十寸
 代時ハ刻よう。ハ時ハ三寸五分乃内ハ四寸
 づとすぢうひよあて。四分づよて針
 よて針と付引たり余ハ是は准へある
 べし。ハ格よていうやうに系よても皆これ
 ごとく事なり。此等可考知



木れりとも目しやうハ削つてもよ木目
 をき拍ハりと木あれがときとある事

名目あり

と一枚を継合を

るハ砂鍋の内へ

碎けたる硝子と

継合をあらへ下

ニ炭火をつま

して又別の砂

鍋ニ炭火を入れて

硝子を入る砂濁

の上へまひ。と下

より火まで焼ハ

碎らる硝子一枚

も継合りのなり。

松系小煙を扱扱

硝子と砂濁へ入るとき

重治とわー加へて

一馬松系とすり。

糸乃かどま。

よて洗ひ古酒よ

一袋浸し。丸出し。

蒸釜よ入て湯の

上よて乾く蒸て

後乾し。平なる石

れ上よ玄挺よて除

よ搗く硝子よし

一本乃本末忘れざるハ川へ流して見るべし。

ぬしがそなうても。なハおもきがるゆへ

下へなりて流るゆへ忘れざるあり

ある人ハ四角なる木目をきがる本あり。これをひく

木像と作り度上へざる。上下去れずト交川へ流し

四角なり本。四百倍布ぎせまぬりト物。上下去れずト

又ハハ。紙よてちりト本。おも流しトハぬれトぬれト

竹の筒花生。其外丸き物と。ひろれなきやう

一竹花生。其外丸き物と。ひろれなきやう

よ切やうハ。先器よみを入く。ろくゆへ

およとき。ひろの中へ。ひ竹の切んと思

おとあ糸よしてまろくよ入。おも知

やこて後。あへ粉糖とろなる。板筒と

そ川し。あけえきバ。ひろひつこけく

際よ筋つくなり。ハ筋れ通りとひき

切れバ。あーもゆがまざるなり

長く大きなる板本と。セはき過

廻し。やくれ草

一枚本過と引廻し。やう。じろハ角乃

竹花生

三

又湯二升中浸し
て蒸釜まで蒸て
後隠乾よし。又石
のこしてこきこ種
けてよよ摘刻烟
葉のどくぬら
を壺に入るとして
かくのどくすれば
味甚よろしき。
松葉烟よし
ぬらり

一烟葉れぬれを
他がどよしと
並よくして。何よて
もぬれ紋と煙板
はぬれきうと煙葉
切葉のこき葉其
よよ葉おまの煙葉
と云ふ。海とあて
際分煙葉らるる
下よて刻へ。刻て
後よよりそと丸
て丸らるぬる葉

家と器せしかり。今ハ枝木の足れき。
左根と紙釜は車の上よ花とくして
枝木とまらなり。よ分て。車し枝木
乃鹿と本挺よて廻すなり
あつめんの燈れあうとかへえせぬ法
一煙のあうりと。火舎なりしよ化へえせぬ
しやうハ。煙土葉の上よ横よ細き木と
とき。其よは煙火乃上へ向て卦葉と
れせよくなり

一中位の竹れと下よ命とこりて
よろよ小と穴とあけ。その中へ葉を
つり。ぬま穴よりあるとよき煙入其
穴とこよりよてくつり。是と炬火よ
は流りなり。炬火乃火氣よて玉板
風味よく飯しなり。ぬれと飯竹の心
しよれなり
伝授門
全奠よりしやうれ事
一葉通と五分などづよ切。又こ次壺よ多

名惠あし

と衣へせ。板よ
服のきつら紋の如
かつ續て。其形
分る。よん中なる。
漬塗地を乾法
一凍塗地を乾し
用ひんとせば。漆の
中へ山椒の粉を合
塗べし。よ凍乾く
ものなり

同法

一漆塗地を乾く
なときハ給の内
よ湯と吹く。又も
茶こんの乾一川
ニツよ湯を入く。
給の内給ぬぬ
る地を入とけむ。
一夜のうらよ乾
なり。米ぬりを
ハ木日かどよを
かよくぬり
及むと白塗れ
すこよ用や付

と入細ぬまを一通とき。漆趣をよ一
をき。又草をま。其上よ索懸を壺。六月れ
鴈。天よ壺に壺とおくべし。何よてもよ。
蓋とまべし。二十日後ときて。自今奥の子生
ずらなり。右丸中よかろつり。ま生すり事
あり。よくくんとくがうり。まとれえべし

泡の貝よ生れ付る。給よても文字
よても乾ハ次事

乃中よりり漆よて。給よても文字よても
一漆かきめれらうりき。ごん、のかき
泡乃貝此中よ。せりり漆よて。給よ
しも文字よても書。泡乃完とよく
つり塞。水と一とい入とき。一月むら
よて水と捨。漆とたろし。えろべし。
書らる事わろく。とすつり。を末代
までありて奇物。此器とけりあり
杖木。漆す。これ木漆ひ
やうれ事
一漆。柱よせんと思入ふ。かど四角よ

名惠の上

不くつを煮て
 白くならは
 一紙すこの厚を
 く落ぬるの
 かり。及石と水よ
 浸しとき。此と指
 てちよ浸し
 及石と水よ
 かり。及石と水よ
 浸しとき。此と指
 てちよ浸し
 及石と水よ
 かり。及石と水よ
 浸しとき。此と指
 てちよ浸し

削りまじらよても繕ひやうハ氣乃
 糞と多くあつめ。あつ灰の上よハ氣乃
 糞と薄く。其よハ厚と薄ハ一紙
 とけハ糞糞化してる。此とかりける。此
 を釜へ入るよと入て湯よ沸し。ハ熱
 湯の中へ木と入く。ちよく煮れば。
 此木和くよ水あり。此木と水よ拭よて
 指へ。繕ひトハ自中よ繕へらなり。
 大和と造るとき。大なりあつき木と
 とめりものく。此とくして。此を
 つくり。是と木。すり粉れハ自中よ
 とめりものく。此とくして。此を
 人形給の眼より。是と出す事
 一人形給の眼より。是と出す事
 ひとりハ。胡粉よ。糞よ。とすりま
 せ。是と水と眼と。此とすりま
 と出す事。此とすりま
 小刀庖丁よ。紙成ハ。焼亦と有り事
 一云。造化なる法ハ。氣乃糞と。ちよよて
 解。小刀庖丁よ。ちよやう。焼亦と。書

名

十六

ハ石の瓦を湯

に浸してよ

煙をよ

炬火を採扱扱

一室を採扱扱

萱草葉を採扱扱

ふき草を採扱扱

竈の上の煤を取

てよし瓦板をの

家柄を採扱扱

竈の上の煤を採

くしてわし。石

田舎の煤とち

よへてよくませ合

せ釜にて焼く煮

て。其煤を採扱扱

よ入添して底の

こまづらと煤と。

又ふき草にて煮。

少く赤くを採扱扱

とせよ。其煤の

内へ丹をとかし

かへし。乾し。煮

てあまて紙を

本月かどときて紙をきくハ。鮮明

よ。せやう竹をかり

石の破らるとつぐ法

一息どて石れ紙のこれらとつぐハ。

燭牛れ紙と紙をかりつぐ。是を以

てつぐべし。石を回さるても永く離る

りかす。但石の破れ口久くなり。或ら

は紙をかり破目よらかりかつけむ。

破らるる。是は其まきつぐべし

石よ文字とすむる法

一石よ文字とすむると思ひ。煙を採

扱扱とすむる。是をよて石よ

文字とすむる。石をせりかきへ投入と

く。六十日ほど。後に出し。是をよて文字と

す。深込はひてもすりても落る。是か

走ら時息のきれぬ法

一息する時息のきれぬ法。をよて出しの時

より。然と呼吸とありく。すりかき。い。紙

をかりても息きれぬ。是をよて。是

ても合さるるハ。紙をかり

紙をかりても息きれぬ。是をよて。是

ても合さるるハ。紙をかり

紙をかりても息きれぬ。是をよて。是

ても合さるるハ。紙をかり

一 解相^{くさう}ぬぐ^{ぬぐ}

一本と日乾^{ひか}まで

其^{その}もと^{もと}と^となる^{なる}は

一 三^{さん}さ^さま^まの^の長^{なが}サ^サと

あり^{あり}二^に日^ひ乾^かま^ま其

本の^{本の}飛^ひ北^{きた}は^は梅^{うめ}

とは^{とは}う^うて^てあ^あも^も遠^{とほ}

ふ^ふり^りの^の。其^其は^は

い^い先^{さき}杖^{つゑ}ま^まて^ても^も指^さ

ま^まて^ても^も又^{また}ハ^ハ麻^あ子の^こ

乾^かま^まて^ても^もゆ^ゆあ^あり^りま^ま



一 晒^{あび}拵^ぢと^と子^こ造^{ぞう}お^おと^とす^す法^{ほう}

一 小^こ物^{もの}の^の晒^{あび}れ^れか^から^らし^しや^や。拵^ぢの^の裏^{うら}に^に生^なし^し

き^きと^と熱^{あつ}灰^ひへ^へ埋^うめ^めじ^じ。死^し出^{しゅ}し^しう^うく^く灰^ひを^を扱^あひ^ひ

但^た紙^しよ^よつ^つて^てあ^あり^りて^てぬ^ぬぐ^ぐ。い^い拵^ぢま^まて^てこ^こす^すれ^れを^を

晒^あし^しく^くお^おけ^け。あ^あも^もい^いさ^さめ^めつ^つす^すし^して^て

う^う。拵^ぢの^の油^{あぶら}も^も物^{もの}よ^よつ^つば^ば。晒^あの^の粘^ねり^りを^をて^てえ^え

が^がけ^けと^とれ^れら^らり^り。生^なま^まし^しき^き拵^ぢを^をき^きこ^こえ^えハ^ハ

乾^かき^きこ^ころ^ろと^と。一^一束^{つか}あ^あり^りま^ま漬^{つけ}と^とき^き。も^もと^とぬ^ぬぐ^ぐ

か^かと^とす^すべ^べし^し。

一 晒^あか^かし^しは^は胡^こ麻^ま煮^にや^やら^られ^れ事^{こと}

一 研^{けん}麻^まと^と紙^しよ^よう^うく^く包^か。丸^{まる}めて^て大^{おほ}の^の中^なへ^へ投^な入^い

る^る。紙^しが^がし^しを^をこ^こけ^けす^す。加^か減^{げん}よ^よく^く懸^かる^る

りの^{りの}なり^り。胡^こ麻^まよ^よか^かぎ^ぎり^り紙^しこ^こげ^げら^らり^り

理^りが^が乃^の理^りなり^り

晒^あか^かし^しは^は白^{しろ}く^くす^する^る事^{こと}

一 夏^{なつ}日^ひ白^{しろ}ぬ^ぬれ^れ時^{とき}。あ^あり^りを^を桶^{かじ}よ^よ汲^くく^く

こ^この^のと^と洗^あへ^へし^し。垢^かと^とよ^よく^くう^うり^りて^てき^き

白^{しろ}く^くな^なら^らり^り

法^{ほう}人^{にん}平^{へい}産^{さん}と^とも^もう^う法^{ほう}

一 法^{ほう}何^{なに}種^{しゆ}の^の産^{さん}ま^まて^ても^も平^{へい}産^{さん}す^する^る

一 法^{ほう}何^{なに}種^{しゆ}の^の産^{さん}ま^まて^ても^も平^{へい}産^{さん}す^する^る

木の教梅の如
 此の如く立て其教
 とてつりらなり。
 たしへ教とまを
 はたろつげとる
 よ。ときよよう教
 ハも極ありの也。
 其教の尺すと
 元て。是と其よ
 ありまを物乃
 すとと覚へ。おま
 木の目教ようつ
 と何人何すと又
 すと此乃よよて
 兼抄め。んをえ
 よまを物の日教
 乃す法子刻付て。
 小かよまを物
 乃兼尺ありと
 ありも極よか
 まを物のかえ
 よまを。見て。則
 ままのさること
 ありへ。或ハ岸

なり。小き紙は黒醜女子成就。ぞひく
 内よ書。上包をれく封じてま
 御守し書。裏に封じのよ。安
 一字書べし。これ秘中乃秘なり

雷れ落さるれ乃法

阿伽多東よ押 刹帝魯南よ押

須陀光西よ押 薩陀摩尼北よ押

右乃札と紙よ書。家此四方此札よ押。こ
 よても阿伽多。刹帝魯。須陀光。薩陀摩尼

陀摩尼し七色人唱へべし。龍衣の舎

と書て天井の真中よ押べし。極震雷

被聖電。降電謝大雨。念彼觀音カ。應

時得消散。い又と七へん唱へべし。かく

乃どくする時ハい家よ雷落らゆは

盗人とあははと法

一其年乃の徳神よ供へる。昆布と

忌焼よし。酒の中へへく。其酒と

うさがいさき人こよ飲しえらべし。

盗らるせれハ忽類腫る草抄なり。

井へ物乃ちらる時。井の底へ

るるるるる

かじ小日教うつ
て。ふ乃教下れ
ども其まきしよ
向又とあて後
長巻よりたへ
る尺とえて。右の
由をいへし。い法
日教とはうらふ
後あつりよ法
て。能考となる。
即時の客和五

町見の道具と
用いしして川
れ幅と即座よ
ら法
一假令川巻をど
よ作て其川の
とあらも候わり。
其川のあより。或
ハ杖の扇よまて
も限立し横
よ句股のてし
して。其句の頭

ゆるさしやうの事

一井乃庵へおれおちうるとらん時。焼
松明をどとさけても庵へ入ぬその
なり。い時より朱お式を一投うつ
ふけおバ。火色は映じて底まで男
やうよんくすくなり

百畠れゆりおよまつらぬ法

一い法ハ其田畠れ四方乃角へるの丸
乃きうくると埋さくべし。まつらうら
奇妙なり

懐み瓶もれ破らるとつぎやうの事

一懐みれ破らるとハ温鈍の粉よ石灰
せんく次と加へあよて移りて搦へし。水
く離れず。瓶の破らるハ漆よ温鈍粉
とかく入とつくへし。瓶のひできあり
てのらと繕くよハ其ひできめの内
乃方へ生葉と細よおろし付て。外
より漆よて繕ひぬらへし。漆次第
ひきめの内へ漆込て。りき事か
茶碗其が焼物に元のわけやうに事

一 股の糸と向
 の川岸の際
 一 通しぬ其杖
 杖をたつ平地
 乃ちへ引廻し
 入前のごとく
 通す。當る所と
 目驗して。今居
 所し目驗の所と
 其る尺の引
 川の幅もある
 我れども向乃
 川岸と後り
 くる所の目ざ
 一の比と。言
 あれば。一透
 あるべし。又
 杖のゆがまざる
 やうに引廻す
 こと肝要なり

一 磁器に穴をあけんと思ふ。其穴
 一 穴と一穴二穴すえ。其あくと種
 せりて其まき穴あくなり

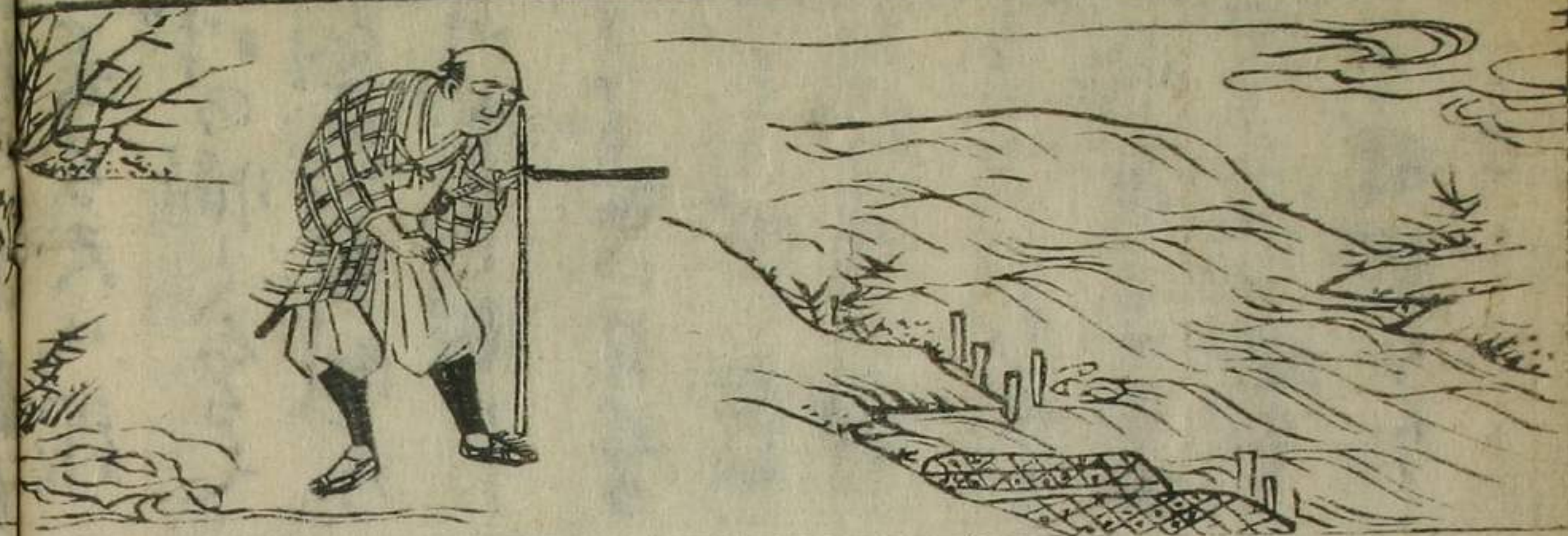
書物よ小口書れ志やう傳授
 一 書物よ小口書とす。只書ハ
 毛つてつづはり。うりおき
 程くす。つづろ。せのなり。新き小
 よても。古き小口よても。洗拭と

一 小口の書べき所と一通ぬぐひ。はるり
 此あるうらよ書べし。但志り。これ
 一 墨よじびゆへか。志りてよ。一。

一 よく廻り。墨もくろくと付。思ふやう
 よ書るなり

竹を扱ふする法

一 砥石 五十すて 礮石 三十すて 膽石
 二十 石灰 五文 四色二色は。研。醸灰汁
 よ入能。抄り合せ。ば。葉よて竹よ行
 ても。紋と。乾き。時あ。一
 其。自。一。又

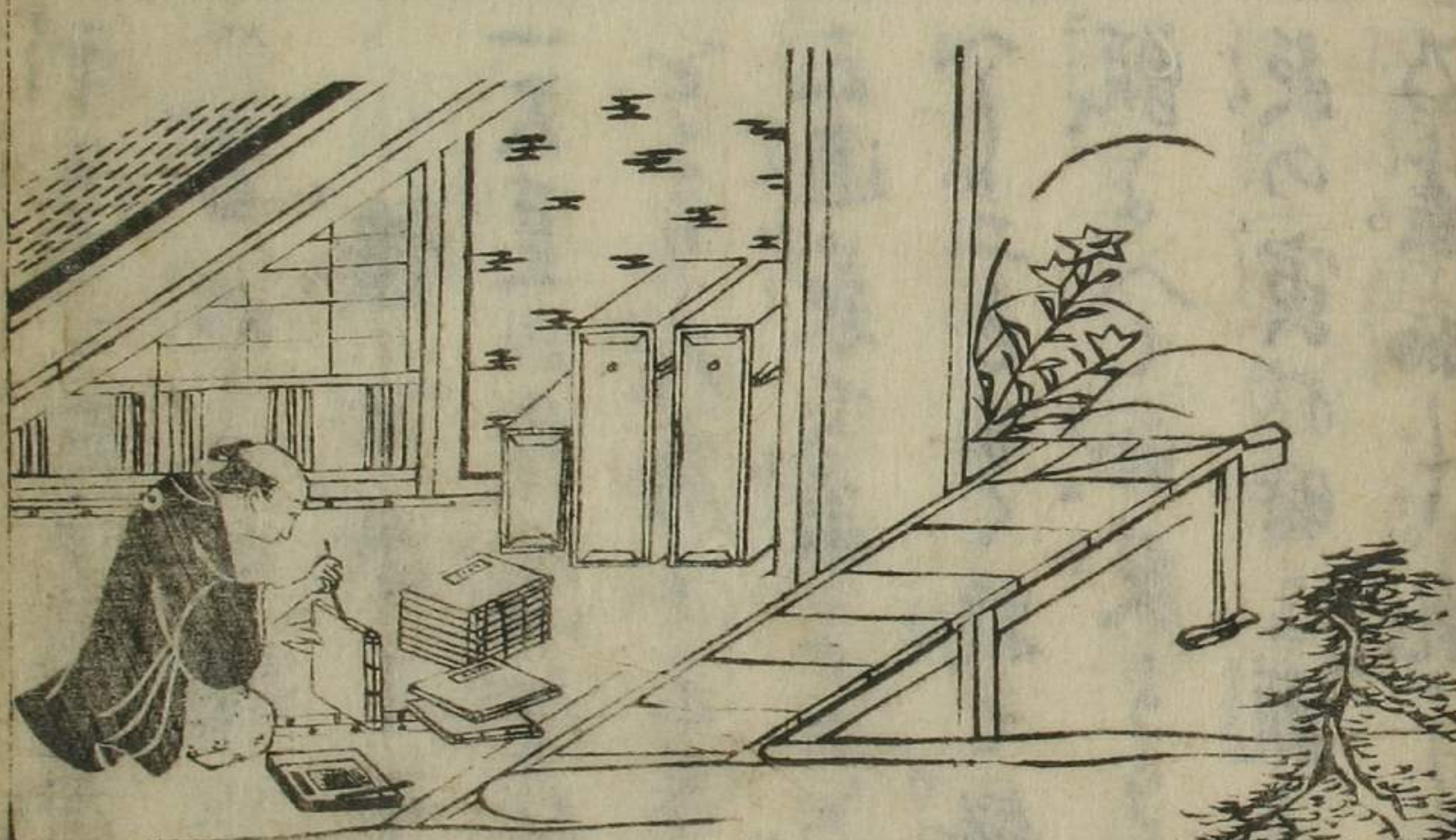


井と掘んして
 水立おとる法
 一井と掘んと欲し
 て。その涌水と考
 らよハ鶴雉の尾
 と比よおこ流
 おくべし。二二時
 ありて是を足
 よ。其下ありあれハ
 木の尾垂なり。
 多なき比ハ先
 ころ多尾垂なり

磁器竹木此類は皆いれ煮よて摸搦
 出来なり

針の皮膚は折入るを抜法
 一酸枣と忍焼よして。温酒よて飲
 じ。よよあれハ食後は服し。下にあれハ
 食ちよ脈次。親乃痒き事あり。
 即之の雨へ抜あるも妙なり。久く
 日と経るも。抜法とよ事なり

寒月宮ありも。手足凍へる法
 一榕の皮と生酒よ二日浸ときて。陰



か。是を氷の
 至而を考へて
 井と掘んとて
 其而のちれ
 烈と兼て知法
 一井と掘んとて
 地の上は兼て丸
 盆とつてけて一
 盆の約を盆の目
 二つじを
 る其而の水
 けれ
 よしてか
 濁り。又其而
 乃ち其れが益
 のうちを
 て足る。是を以て
 其而乃ち其れ
 魚と考へて
 之を池とす
 けり。まて海
 子と云ふや
 一泉氷と云ふ
 れ。眞言

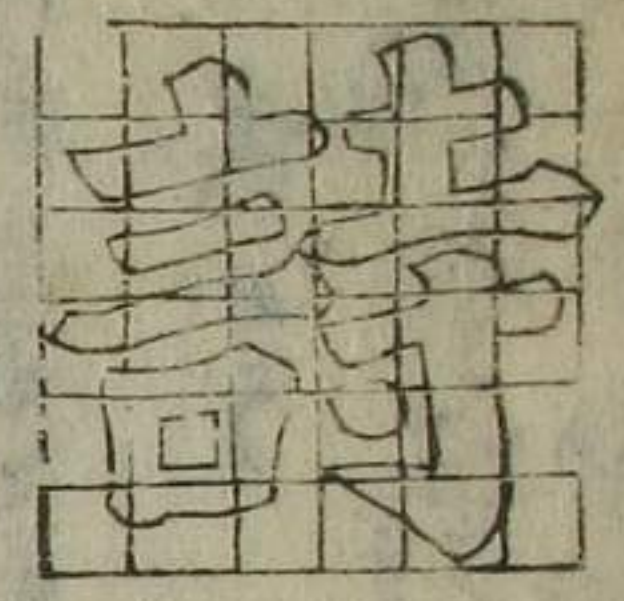
下にして務よし。寒月を是よりぬれ
 氷も凍へさるなり
 儀と除く可
 一大豆六升。淘はひ。之を蒸て皮
 とさり。大麻よ三升より一升浸し
 之を蒸て。麻よ口と用く。附皮を玄
 へ。二をよく搗て餅のごく丸め。
 甑よ入て。初夜より夜半まで蒸て。
 夜の寅れ時よ甑より丸出。ゆ
 乃ち晝に晒し。乾して務よし。い
 けれと飽かど食して。一切の物と喰
 次。指一食飽かど食すれ。七日乃ち間
 又七日と飽かど食すれ。四十九日
 四十九日とて食すれ。二百日飽す。二百日とて
 食すれ。二千四百日飽す。つまでもか
 一。湯を煮よ麻子の湯と飲べ。り
 乃ち食せんと思ひ。冬を蒸よ三合を
 て湯よせん。酒して服す。右乃ち兼
 ところよくして。大使よ下るなり。其
 考のよく食す。進てか。も害なり。い

然れども水添
 く漉る時ハ系
 あし。凡そ系
 の中と一便回と
 搦て。下の搦よ
 竹の簀と至其
 上よ小石とあぶ
 立て。清水と入し
 洗ひ石のろり
 簀の下は落て
 其あきよ澄
 此のゆり

茶の濃茶と久
 貯し。欲せハ茶
 壺の底よ掃と並
 其上よ茶と入
 とくべし。高掃久
 く味う。久又長
 茶も味よくぬ
 乾炭約脊と並
 く煮やう
 乾炭せんまいと並
 くせんと思ふ。桐葉

と用也れバ。筋強顔よくして憔悴する
 事なりし。王氏農書よよくし
 或人以後のしこくしてたりのるよ。よく後のごく
 能とれそきてか。しも言りし。し
 小字と大字よ写す法

一文字と切ぬき火よ福すおど法あれ
 とも。自中よ出来く。只基盤
 系の割といく文字と写せば。か。も
 遠く事なり。喻。小字と一川填廓
 して。堅横よ系と引。其系乃幅
 如何。後し積。か。紙よ始の系よ
 了。廣く。其基盤系と始の教。ど。う
 り。か。の。小字系の内。幾りれ。い。づ。れ。の
 所へ。点。畫。あ。ら。う。と。し。み。と。見。て。後。よ
 搦へ。る。系。の。内。よ。て。文。字。と。他。れ。む。
 筆。勢。恰。好。か。し。と。背。く。事。お。し。
 か。の。て。く。次。来。く。よ。其。基。盤。系。と。搦
 へ。て。写。せ。ば。い。う。種。の。大。字。よ。も。な。ら。う。な。り。
 大。字。と。小。字。よ。す。ら。も。お。れ。法。の。て。く
 よ。し。て。次。来。よ。系。式。で。め。て。他。ら。あり。
 終。よ。て。も。ふ。お。日。し



よて糞べし。いさ
甚きくして己

事なり

餅を水漬玉

て久野小法

一を水漬玉

八合入金よて煎

乾らるとよつぎ

うる粉をよよて

洗ひ落し。柱ハ

うして後右の煎

乃ある漬玉て

但壺よ入てよし。

かくのごくすれバ

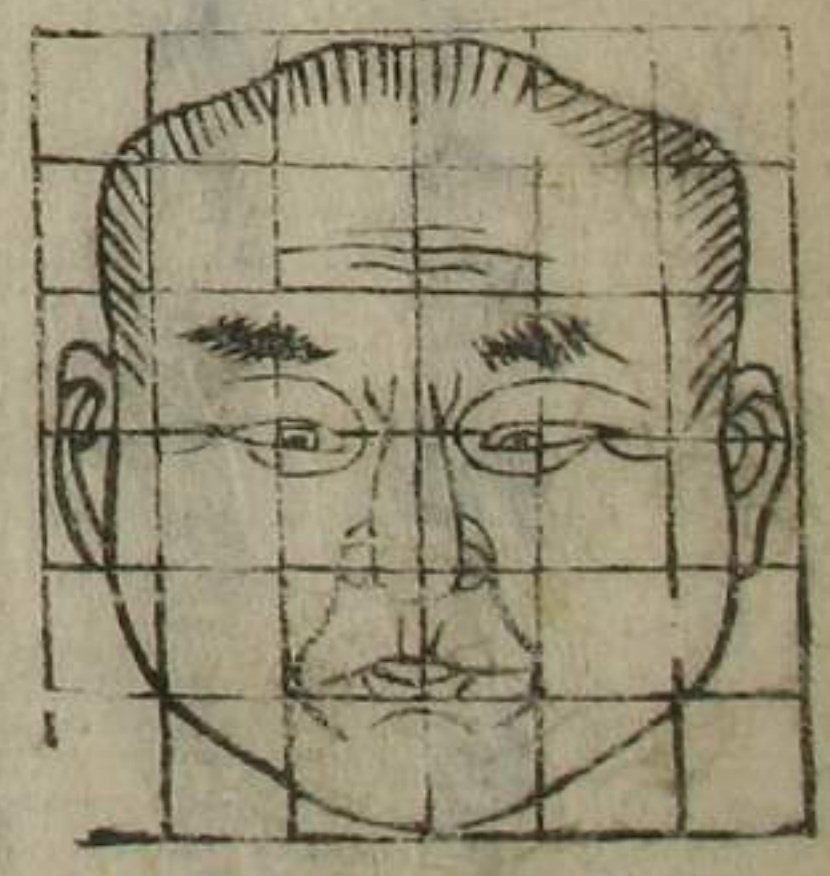
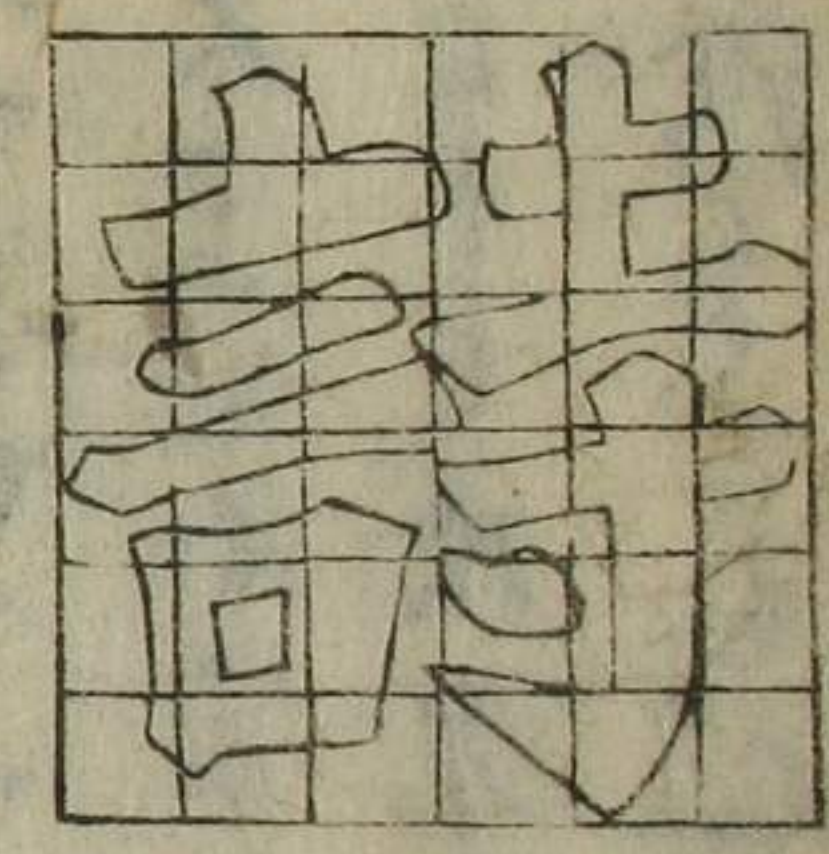
あそぢるおく。

久く貯く味損

せま

巻物小に裁次

乃秘結



湯のごく次先くよ系れらと大よと

べし。小より煎よ大字よすれバ遠ふも

乃なり。次先くよ廣く揃へて写せば

皆く事なり。大字と小字よするも

日一ふ均なるべし

小量飛行散

一荊芥

防風

茶烏次

細辛

葉本

又味細末

して茶履

茶

鞋れららよぬるなり。油よてとれぬる

も程よし。何程及と歩めてと

茶臥事なり

磁器に引切やうれ事

一是ぎらりよきつるべきと思ふ。内ハ

より筋を引。此筋ぎらりよ地へ埋

内ハ筋ぎらりよあを入。其よよて茶

を焼べし。其後延よてよへ出ら

一卷物乃小口と切
ハ徑師屋此秘傳

よて切やうと人
よんせざらぬり。

ハ秘傳ハ九竹と
挽きうそれと二

川よふり。是を
あて裁べし。思

ふやうよ切トク
維其介肌を

等の油垢を
おとす傳

一袖衣ハ肌を
油とき入をどの

着ころハ垢ち
うぬりなり。ハ垢

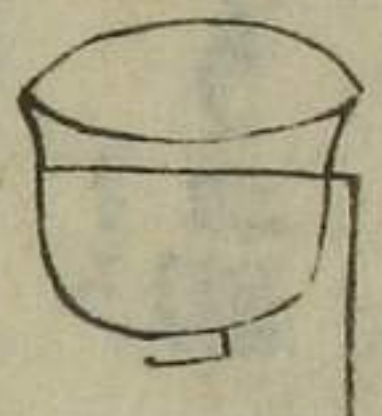
とおとす。ハ。灰
油よえか

ハ垢と一極入
て洗ふべし。

袴となりよ
くゑやれ傳

一上下のとの下
れ方を暖れどく

処とくべし。引切らるごとくよぎハ
よく切るなり



「是ぎりひきし」思つ。是ぎり
上へ割こ内もひ筋きりよろと入也

板よ書らる文字落を事

一板の板板をよ書らる文字と。落し

度時ハ。塩と拵よてとりつけ。落せば

煮らげらるなり。又葉此白灰よて

拵もよし

猫乃眼腸よて十二時とあら法

一卯酉・辰戌申寅・己亥未丑

午子

右の書とひくあらべし。ハ葉の

一時づよて。かりなり。煮へるく

六九く四ハ此さのふと七と

か。ぬまごなりよて九川と

聖よ油こがら紙落しやう

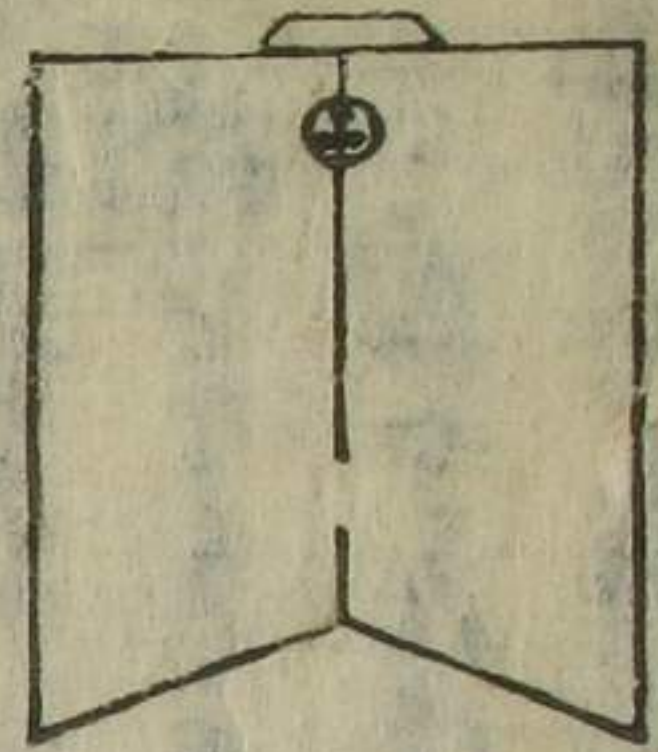
一聖よ油覆よ融度よあとかく

くくれハ油あよ涼と拭ひらるべし

ぬあれハ落也。其時粘とく

名惠あり

四五



胸のふとくぐり
くまりのいばき
後腰二文字よ
かてなりよまき
あさがりよおび
しておびの結び
四角なりよこ

のあてやう。そのハ
おび一をいよあて。
二廻りあさりよこ
おびの下乃ちあん
どへ廻し。後よて
結びひ也。紐腰板
ゆがまざるぬよ肩
衣の脊すぢら



沖のうらうら廣さかどよ紙よわつく粘
と付きへり付とくべし。翌日紙と
これバきよ沖のたなりし

きよつきの盈らると落しやう
一きよつきを此盈れらるハあとりけてか
けハきよき乃月へし込く懸し。
其まきときよきよく干て後。新しき
草履よてこすりへしうく落らざり

衣服よ沖き付方と落しやうれ事
一敷夏 烏真骨 滑石 白炭

各ホを右粉よしして沖の付らるハ沖と
かしかけく潤がし一敷ときよきれ付
つささるハ洗きとかけく潤がし。右の
粉と付て洗ひ焼ふよて其上と摺し
又其の付らるハ生の香仁と嚼て吐
出し洗ふべし。粟乃飯と摺付て洗
ふもよし

衣服よ酒のちとらと洗はずし
落し事
一衣服よ酒のしとらよハ。友の死ふ

かくのごとくまじ
すくよめて。腰板
の紐と袖紐は
下へぬき通し



さらさら結びト。
紐肩衣れ腰を
らりしぬの端
とぬきよめてか

腰一文字よかり
大やうよて着

がりよきなり
北震れゆると
あつこま加法

一溝或ハ川おど
らり類又湯気
乃之幸あはは
必其日大北震

ゆつこふらへし
他中をいあどよ
約かく溝川田

うげかーとま紐の上下よ交。紙とあて
つろく新石とかけそへし。炭乃死酒
氣を吸て少しも油く沈落らあり

秘傳松茸白ひ失ざら淡やうれ法

一松茸れ笠はうと。大あは六川よ割。
中やハ四川

塩俵のめうとこまひきき。右の笠とあ

ふのけふ一通りあうぶとよ塩とこま比よ

た川ありとゆり。まきこめ。又右のぐくく

通りもかくれとら。まきこめ。とと繩

よてうけ。苞のぐくく。踏ひ。およつり

べし。ぬいつよても入用れ時。お日らり

出し。よく塩と出し。煮扱およつらふよ

白ひあ〜〜〜くえらら。おまがんおまき
敷とつけべし

夏日炭火あよて湯と沸す幸

一水と盆一とい入かと積り。桶よ入。日よ

照しときて温あとりり時。盆へ入。火

所よ炭火とおこし。竈の下よゆよて

も其室として。火所と盆れ底へまくと

きて。竈の口よ息出あり蓋とすば
炭火か〜よて。大盆れ湯も沸たり

あびりうり薬の
れがらも湯乳れ
やうよこん田れも
それとららぶん
あやまるべうし
四分を付やう

乃秘傳
一四分六洞四分
へ根一分入ト友
四分とよひを

針葉法
一雄世二拾目
生塩 十々

硝磺 二々
丹礬 二々
碌礬 二々

右米の砂よて
とき。四分一つけ
警時控トへば。
を付トとちよ
て洗ひ落し。塩
よてこうく磨き。
其あといふま
て洗ひ落トへハ

秘傳筆乃凌やう乃法

一筆とばなぐらと切。竹串よて束
まで通し穴とあけ。熱湯へ一色ん通
し。そりよえなぐらへ。運まよれなぐら。
茶うら塩と中へ入。粗磨よ包ことき
つひト時皮とろり。よきころよ刃て
塩と出。筆養よすべし。只今ろり
うら筆れごら

小便と久くこへる法
一小便あけきとあくらよハ。松葉水
よくのりこて肺の内へ入とくべし

蠟燭と空よつら法

一蠟燭とよくくんとそこ紙ざらやう

よして中へ 銀蠟 白蛇

龍腦 三々 是とろ根よて煉合し。

んへ入。鹿の方礬葉の出ざらやうよ
つめとき。いつまでも火とともすべし。

蠟燭中よてこりら 奇好なり

燈 燈 燈 燈 燈 燈 燈 燈 燈 燈

一燈灯よ油とひけハ。あぐらくれ中よあ

足辛よ成く

金漆乃方

一器金長か金

の器乾のこれ

てのりとかとす

よハ やすり粉の

せん香 温磁

ころろー

右あよてよく

初りてこれめへ

初り付へし。大

あていて右乃

茶初り付外。

これおの州村

よて初といけ

は法なり

目を焼付はやう

一切初初下地

洞なふうしく

消炭よてみまき。

後初初とらすく

ひきまかよて

うけり古くならあり。硫砂 紙よいくもの

とひららぐらう。いつまでも動くてあ

りらうもつり

搗米まぐらうやう

一夏のはハ搗米臭くならむ

つらまのなり。糖もよとく。飯

授なり。入用初つらむつらふべ

書物衣乾よ出入らう事

一書物よ虫入らう志やう。書背を固

へ。あせがしつらと入とくへ。衣乾

もは法よ。又衣乾よ。簞子よ

草花実と入とよ。俗かつらより

とつらものなり。又皮蒲團の乾ハ日

よ干て。草花実とつけがよ

蒲團乃らよ入とけがまぐらうなり

髪と黒く。光澤とあは法

一髪は黒く。光澤と出は。酸漿を

よて大豆と煮汁とて髪よめらなり

法やありて漆れど。又方乳香を

胡麻油よ入。七日ときて髪よ搽ら

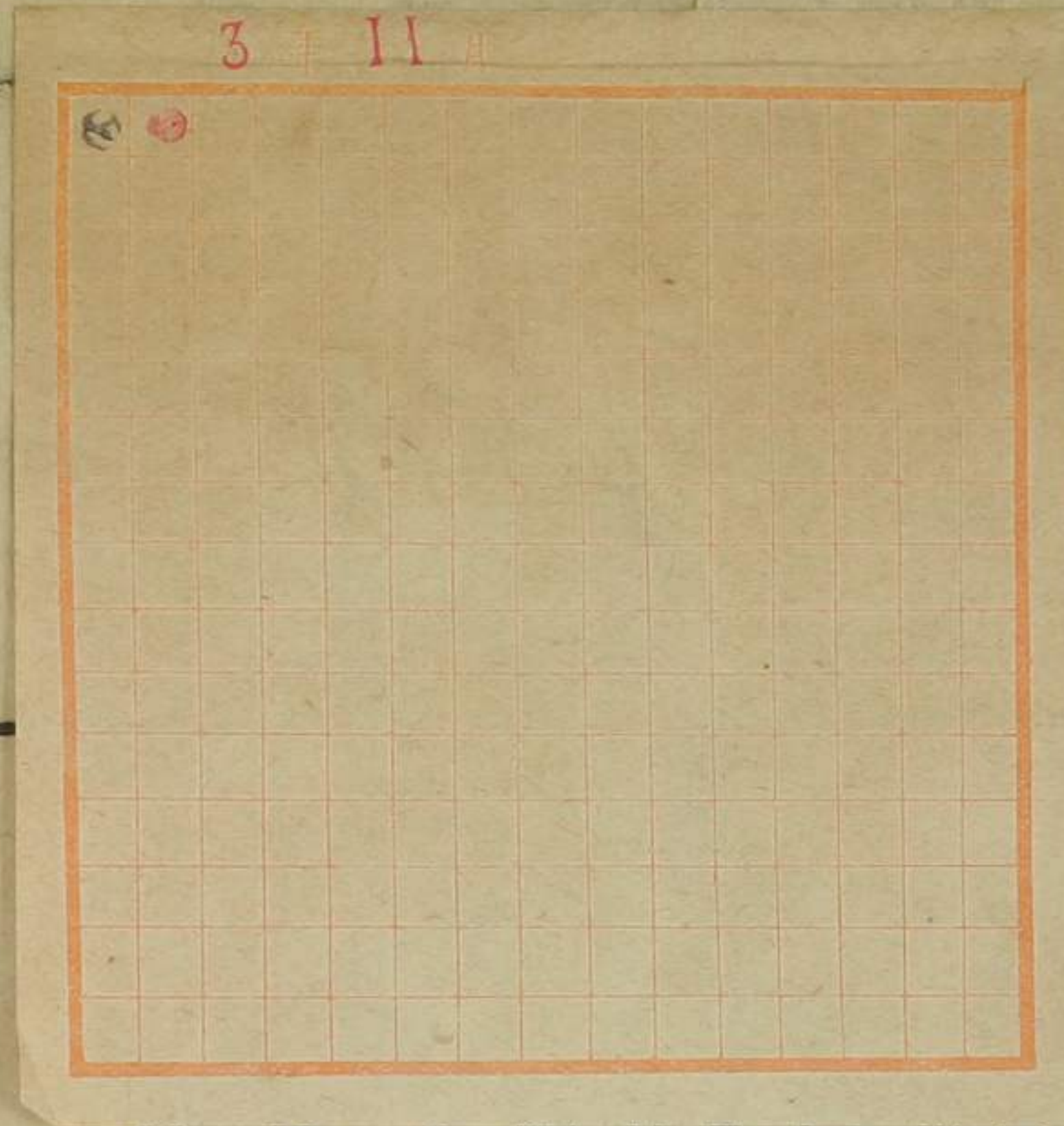
する。あまりの浪
 浪のやうな浪の
 上ろし。うすく
 引。揺念よても
 浪よても浴を
 け。唐綿よてもへ
 うり押付る。む何
 べんもつけは。扱又
 あり浪の性うすく
 ありしころときか
 一おのてくよ
 張よても銀よても
 箔よてもきせりおり
 何べんもきせりお
 上焼付よなりこ
 扱よきと思ふ
 とき大とわし
 ねう。火の上
 よまよと其ま
 煙を合
 よ上。あへ入よき
 扱はよの棒よ
 てみぎトへは

よ那 風くならり
 日相に吾熱とある法
 一日乃出る時 虹日よ向ひ東の方へ
 乃八日相よし
 一日の出る時 虹よ向ひ日相し
 一 東北方よ虹よ向ひ日相し
 一 相晴く日相よけきハ三日とよ
 一 三日をよけれハ十二三日をよし
 一 五日 晴く天氣よ多れハ十二
 一日かどあつてきよし
 一 二日月此先とがりハ日相し
 一 四日月此先とがり。月の光つよけ
 れハ。其月中よし
 一 月の光り、白けきハ天氣し
 一日乃へよ西の方ありきハ日相し
 一日の出る時 東北方よ黒雲出。又赤き
 雲あり時ハ。四日かどもお續き日
 相あし
 一 東北降晴。赤よ翌日照る降るを
 ありよハ。必 梅花の易書中指南

多惠海上

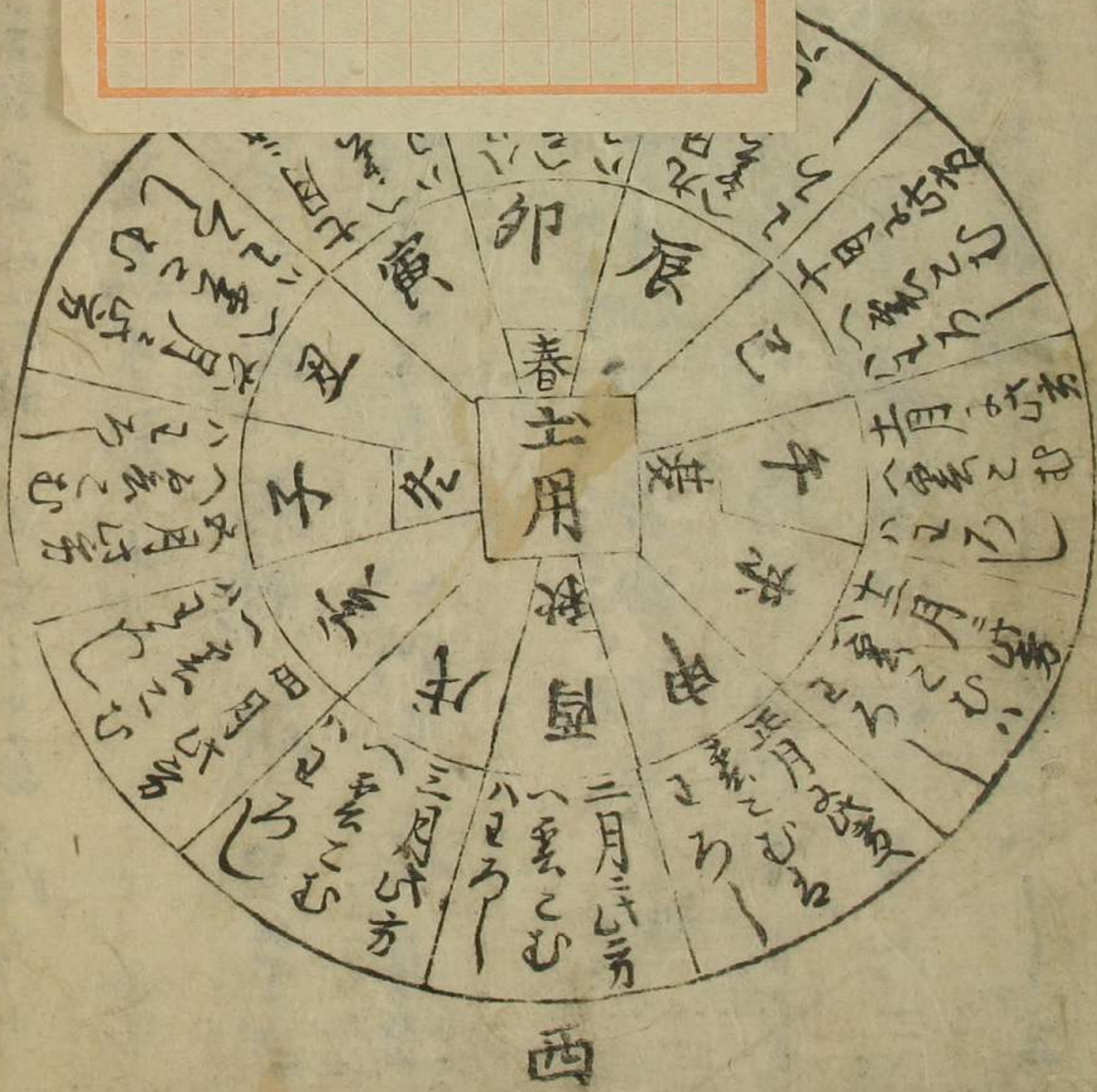
九

三洞のくすかへ
へ右の汁を入。湯
よても何よても



水仙なき時
も仙と扱入す
る法

一水仙のさうりれ
ころ新き水仙と。
夏の下ふまて
へ。あまでも
扱之。水仙なきころ
の下より出。扱入
す。あまをよこ
免せ。くすかへ
よ一息あるなり



菊とままで野の法

一菊は花を摘み用むべし。枝をとり。筒よ
人肌の湯とほそそ一ふ入。右の菊と扱
まで沈むやうに漬く。戸扱へ入よく戸
と一めとき。ば湯さめて後湯と捨て
とかえべし。ざく下よりくすり入なり。四
て出。一えく切て捨べし

桂の花の落さる法

一桂は死乃葉の中へ塩とかし入さべし。本
小あはれも又切花も扱落さるなり

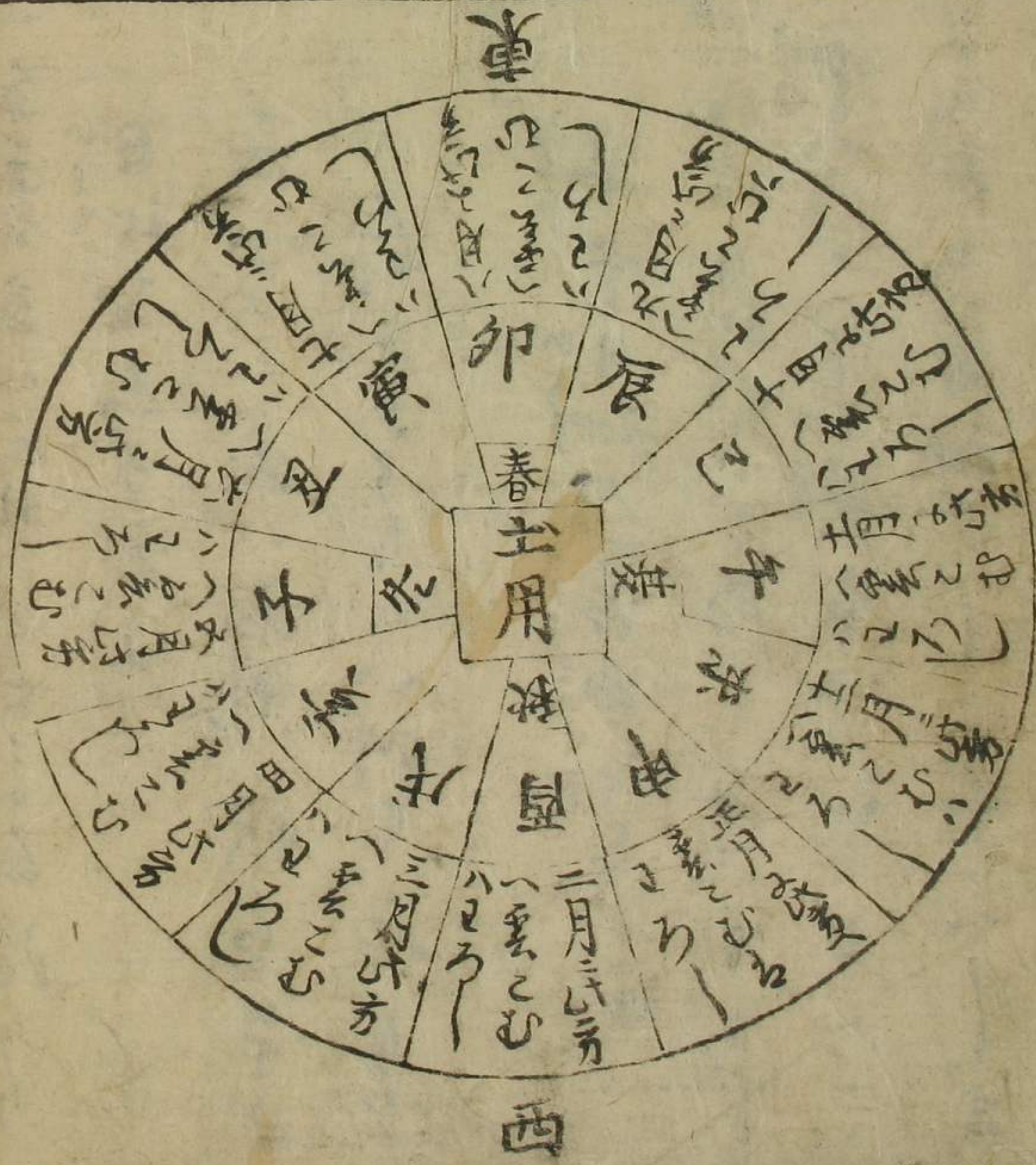
増補拾玉智恵海卷之上 畢

三洞のくすかへ
 へ右の汁を入。湯
 よても何よても
 こものさぶよて
 くら。液を熱ん
 ばよくを分こ
 煎かん 泡丸乃
 つうごらやうよ
 念と入べし。

水仙なき時を
 水仙と極入す
 る法

一水仙のさうりれ
 ころ新き水仙と。
 魚の下ふまてとく
 べし。あまでも体
 拵く。水仙なきころを
 の下より出し。極入よ
 すらよあをよけ
 免けくへくはま
 よ一息あるなり

新薬のし



菊とままで野小法

一菊れを極と用おべし。次。枝をとり。筒よ
 人肌ひしの湯とほそそ一まい入。右の菊と極
 まで沈じやうに漬く。戸たか極入よよく戸
 としめとき。ば湯さめて後湯と捨てあ
 とかえべし。ざく下よりくさう入なり。四
 こ出いんく切て捨べし

桂の花落さる法

一桂れ死乃葉の中へ塩とかい入さくべし。本
 小あれたも又切れたるも極おつ落らゆか
 増補拾玉智恵海卷之上 畢

名意の上



